

## 生まれつきの「違い」が

## もたらすこと(後編)

令和3年を振り返ると、「多様性」または「ダイバーシティ」ということが、新聞に書かれていない日はおそろしく一度もなかったのではないだろうかと思えるほど、さまざまな場面で注目された一年だったのでなかったでしょうか。「多様性」は、「幅広く性質の異なる群が存在する」という意味で、自然界の「生物の多様性」を含む広い範囲で用いられますが、一方「ダイバーシティ」は、「人間の多様性」を表現する場面で聞かれることが多いことです。

その「ダイバーシティ」は、性別、年齢、国籍、人種、性的指向、宗教、障がいの有無など、いわゆるその社会での「少数派(マイノリティー)」を示しますが、経済社会では経済産業省の取組みとして「ダイバーシティ経営」を推奨し、多様な人材を活かし成果に結びつけることができた企業を「ダイバーシティ経営企業100選」として表彰するという取組みが、平成24年から行われています。

しかし、実際には過去9年間に表彰された企業を閲覧しても、熊本県の企業は平成24年に山鹿市の1企業ののみ、私たちの暮らす宇土市で、その取組みを肌で感じられるようになるまでに、いったい何年の歳月が必要だろうかと考えざるを得ず、まだまだ遠い現実のように思えます。

## 発達に「違い」のある子ども達の環境

では、目の前の子ども達をそのような社会に送り出すために、療育者、支援者、周囲の大人が今すべきことは何であらうかと考えたとき、果たして、誰がその子の価値を正しく見出しているだろうかと疑問に思うことがあります。

実際、子どもの療育に必要な「利用計画」や「個別支援計画」を見たときに、多くは周囲の大人が困っていることや、集団の中で周囲が困っていることに、この子はどう変えたら良いのかが多く、必然的に目標やプログラムは「トレーニング」のような、本人を鍛える要素が多くなってしまう。

もともと、脳機能そのものに違いがあり、見え方、聞こえ方、感じ方が違う「発達障がい」の子ども達は、標準的な発達を遂げた人には想像もつかない混乱の中に生きています。しかし、その混乱を表現する術がなく、耐えて耐えて堪えられなくなり、挙句に大きな声を出すしかなかった、泣き叫ぶしかなかった、暴れて周囲の人を振り払うしかなかった、そして「社会性がない、空気が読めない」と言われた、しかし、その行為に至った理由を、固定観念なしに

聞いてくれた大人が、周囲にどれだけいたでしょうか。そのような大人の存在が周囲にあったか否かで、その子の将来はある程度決まってしまうと言っても過言ではありません。

## 子どもが自分の価値を正しく知るための「自己認知」

発達障がい、いわゆる「自閉症スペクトラム障害(ASD)」「注意欠陥多動性障害(ADHD)」「学習障害(LD)」などは、その子の表面的な姿からは周囲が正しく理解することが十分にできない障がいであり、また、子ども自身も「標準」や「普通」とは違う世界に存在していることを自力で正しく認知することはとても困難です。

大人になる以前に、あまりにも叱られたり、否定されたり、まだ十分に発達しきれていないゆえにできないことを鍛えられたり、自分自身の価値を見出す余裕もなく、時が来たら社会に放り出されなければならぬ、ではその時、何を自分の自信とし、何を糧にして生きていかなければならないのか、本来はこのことこそ子ども時代に、関わる周囲の大人と一緒に「認知」しておかなければならないことです。「標準」や「普通」からはみ出さないことばかりに囚われていると、本当は「宝」であることすら見つけられずに、子ども時代を通過してしまふこともあります。

## 発達障がいの子どもに関わる人の「コミュニケーション能力の重要性」

前述したように、特に幼児期、低学

年時代の子ども達は、標準的な発達の人からは信じがたいような「混乱」の中にいます。特に「感覚受容の特性」の影響は重く、集団の中のトラブルの多くはそこに起因しています。中学以降、幼少時より感覚が受け入れやすくなることもあり、不快に感じていてもトラブルになるような形で表現をせずにはまんず、というだけで、いわゆる「普通」の感覚になるわけではありません。露わに表現すると周囲に気づかれ、奇異な目で見られることに不安や恐れを抱くこともあり、社会性を身に着けつつある高学年、思春期の子どもの特徴として、周囲の大人の気づきが必要で。

そのような子ども達に、早期から「どうしてそうしたの？」と怒らずに理由を聞く、また、これまでの経緯から探ったり、医学的な視点から原因を調べたりしてその行動の裏付けをする、「脳機能」そのものが違うのですから、ある意味それが、発達障がいの子どもらに対するコミュニケーション上の礼儀と言えるでしょう。

障がい児、という以前に一人の「子ども」として、十分に愛された経験、それが「糧」となり、支えとなります。おろそかになりがちな子どもの人権を守る人の存在が、まだ不安定な現実社会に立ち向かう力を備えた大人を、先々増やしていくことにつながるのではないのでしょうか。

文書寄贈 NPO法人こころコミュニケーション

の発達支援